加飾フィルム、CASE追い風

ウェーブロック・アドバンスト・テクノロジー（ウェーブロックAT、東京都中央区、島田康太郎社長）は、自動車のCASE（コネクテッド、自動運転、シェアリング、電動化）を追い風に、金属調加飾フィルムの事業規模を海外メーカー向けで拡大している。光線と電波を透過でき、エンブレムやセンサーの加飾に役立つ。島田社長に動向を聞いた。

ウェーブロック・アドバンスト・テクノロジー社長 **島田 康太郎氏**

海外伸長、米・印で部品増産

―需要増の要因は。

「加飾フィルムはメッキや塗装を代替でき、無人運転や電気自動車（EV）シフト、環境対策の潮流など追い風が吹いている。自動車に求められる機能が変化する中、デザインと機能を両立できる。（メッキや塗装と比べ）表面処理の二酸化炭素（CO_2）排出を低減する効果もある」

「自社商品の高透明多層フィルムはEVの内装デザインの〝未来感〟に対応できる。ガラスに比べ大型モニターを軽量化でき、曲面ディスプレーの加工もしやすい。加飾フィルムは外装、透明フィルムは内装で事業を拡大する」

―事業規模は。

「15年前はウェーブロックATの加飾フィルムの売上高が年約4億円だったが、25年3月期は約30億円に伸長した。加えて米国現地法人の売上高は設立から7年で約17億円まで成長した。25年3月期の連結売上高は約61億円の見込みで、前期に比べて増収増益だ。加飾フィルムの売り上げの8割が海外向けとなっており、CASEを見据え海外事業基盤を積極的に構築してきたことが奏功した」

―15日にインド現地法人を稼働します。

「これまで10年以上、出張ベースで営業活動を行い、バイクのエンブレムに加飾フィルムが採用されてきた。現地メーカーのタタ自動車など4輪車でも採用され、現地法人を設立することで営業体制を強化する。近年、インドでも4輪車への加飾が広がる一方、生産台数の増加に伴って環境規制は厳しくなっており、環境負荷が小さい加飾フィルムの需要増が見込める。日本で生産した加飾フィルムを現地で成形する部品生産事業も始めたい」

―成長戦略は。

「米国、インドで部品の現地生産を拡大したい。市場規模がさらに膨らめば、工場を構えて加飾フィルムを現地生産することも必要と考えている。さらに次の切り口には欧州が挙げられるが、欧州メーカー向けは中国勢との価格競争にさらされる。米国、インドはまだ伸びしろがあり、まずはそこに注力する。日本も生産キャパシティーが厳しくなっており、しっかり投資したい」

記者の目

採用実績強みに新規開拓

「自動車向けは採用実績がモノを言う」と島田社長は実感している。金属調加飾フィルムは国内でも採用実績があるが、近年の伸びは海外向けが中心だ。特にインドは24年に現地2メーカーが採用し勢いづく。同国は自動車生産台数が急増しており、事業成長の期待感は大きい。現地スズキ傘下企業の開拓も狙う。

（辻本亮平）

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社